



Hiroshima City University Language Center

広島市立大学語学センター
Newsletter No.43 (2012.5.25)



Carol Rinnert 先生、退任メッセージ

国際学部の Carol Rinnert 先生が昨年度末の 3 月 31 日付で退任されました。Rinnert 先生は開学準備期から大学の英語教育に深く関わって来られ、今年で 10 年目を迎える夏期集中講座、Hiroshima and Peace でも、やはりその準備期から中心的なメンバーの一人でした。退任はされましたが、今年度は客員教授として引き続き大学に在籍され、授業も受け持っていていらっしゃいます。

プライベートではベリーダンスの先生としても活躍されているリナート先生ですが、外国語との出会いからどんどん世界が広がり、言語学の研究・教育に携わられた経緯を振り返って書いてくださいました。

目次：

Carol Rinnert 先生退任メッセージ

国際学部 Carol Rinnert 先生・・・・・・・・・・ 1

祝出版 大井先生「絵のまえ本のうしろ」・・・・ 2

本の使い方または『ローマ帝国衰亡史』のこと

国際学部・芸術学研究科前教授

大井健地先生・・・・・・ 3

ミニコラム 事務局 向久保享さん・・・・・・ 4

グローバル・ヒバクシャ・プロジェクト・・・・・・ 4

Expanding our Minds and Hearts through Foreign Language

国際学部客員教授・国際学部前教授 Carol Rinnert

Encounters through foreign languages

Knowing another language is the only way to truly understand our own language. This insight has been attributed to Goethe, the famous German thinker. In fact, most people who have learned a second language have discovered many things about their own language and way of looking at the world. At the same time, they have expanded their mind – and perhaps changed their worldview. In my case, the languages I have learned beyond my first language, American English, have had big effects on both my mind and my heart.

I still remember the first time I realized, on more than a theoretical level, that not everyone could speak and understand English. I was 12 years old, traveling with my family from our home in California across the U.S. and up into eastern Canada. We stayed overnight at a small motel in rural Quebec. When my brother, sister and I went swimming in a small pond with other children there, everyone but us was speaking French. I remember feeling frustrated when we couldn't understand them and they couldn't understand us. At the same time, I felt inspired to learn how to speak another language well enough to communicate with people from different linguistic and cultural backgrounds.

Considering that I grew up in Los Angeles, it may seem surprising that it took a trip all the way to Quebec for me to encounter children my age speaking another language. Los Angeles has always had an enormous number of Spanish-speaking people, but none of them lived in my neighborhood or attended



◆初めての中国旅行で、上海豫園にて

the same schools I did. When it came time to start studying a foreign language in junior high school, I chose Spanish instead of French because I lived so close to Mexico. I was lucky enough to have enthusiastic Spanish-speaking teachers who used a lot of Spanish in the class. I was motivated to major in Spanish, along with science and math, in high school.

Even though I never got to know any Spanish-speaking friends my own age in Los Angeles, as a 4th year college student, my knowledge of Spanish helped me when I was a volunteer English tutor for Mexican junior and senior high school students who had recently moved to the U.S. Also, when I traveled through Spain as a tourist, being able to talk to people in Spanish made my trip easy and fun, and I was able to understand first-hand the importance of close family relations among the Spanish people I met.

(P2 へ続く→)



祝出版

大井先生「絵のまえ本のうしろ」

語学センター・語学教務員 堀本 真由美



◆「絵のまえ本のうしろ」
装幀や挿図も先生による

昨年度末、国際学部・芸術学研究科教授、大井健二（ペンネーム、大井健地）先生が退任され、それを記念した本「絵のまえ本のうしろ」が3月22日に溪水社より出版されました。実はこの本には、これまで先生が語学センターニューズレターに寄稿してくださった記事のうち31回分が収載されています。

語学センターニューズレターが最初に発行されたのは本学開学2年目の1995年。それからしばらくの休止の後、1998年の第2号から本格的に再始動し、先生の連載記事が始まったのは2000年の第7号からです。連載は前号（No.42）までの12年間で9シリーズ36回を重ね、このニューズレターの歴史の一部になっています。最初の記事が掲載された第7号の編集者注には「（この4回連載の）最終号にどなたが筆者かという種あかしをさせていただく予定です」とあるのですが、毎回記事に添えられる「減点減棒天井」「zero zero 愛」「芸国斎奇抜大軒」など頓知の効いたペンネームも謎々のように楽しく、結局種あかしの機会を逃したままでした。先生のご退任を機にようやく種あかしとなりましたが、見事ペンネームを解説し、筆者が既におわりの読者の方もいらっしゃったのではないのでしょうか。

先生から執筆をお申し出いただき、思いがけず長い間楽しい機会をいただいたことをとても幸運に嬉しく思っています。何度も推敲された手書き原稿の記事は先生の圧倒的な読書経験に裏打ちされ、厳選吟味された言葉で縦横無尽に綴られています。熱意に溢れウィットに富んだ記事を読んでいると、いろいろな作家や作品に出会いたくならずにはいられません。是非たくさんの皆さんにこの本と出会っていただけますように。

<書籍お問い合わせ先：溪水社・TEL 082-246-7909 定価 1,470 円>（次頁に関連記事）

◆大井先生、手書き原稿



（→ P1 から続く）

How exciting language study can be!

When we had a foreign exchange student from France living with my family during my senior year in high school, I became very motivated to learn French. I studied French in college and spent my junior year in Paris studying with other foreign students at the Sorbonne. It was an exciting time, and I was lucky enough to receive credit by writing research papers and taking exams on French language and art history when I returned to my college in Los Angeles. Then I discovered linguistics, a required course for me as a French major, during my senior year. It was the perfect area of study for me. I was most interested in languages, but math and science came easier to me than speaking a foreign language.

So linguistics, the scientific study of language, was an ideal major for me in graduate school.

Because I had loved living in Paris, I decided to enter a linguistics Masters program in Grenoble, France. I lived with a French woman and her baby and decided to speak only French. I purposely stayed away from English speakers, and my French fluency improved a lot. Because I could understand the TV news reports in French, I was able to see the Vietnam War from another perspective besides the one-sided view presented in American news reports. After one year in Grenoble, I decided to return to the U.S. to earn a doctorate in linguistics

at State University of New York at Buffalo. There I participated in anti-war activities, and was proud to be part of the movement that eventually brought an end to that terrible war.



◆ "Bedouin Cane Dancer",
in Idaho

I didn't think I would ever become a teacher. That is because in college I had an extremely inspiring French and linguistics teacher, and I knew I could never be the brilliant teacher he was. However, in Grenoble I had another linguistics teacher who was a very boring lecturer. It struck me that any students who heard his lectures would never realize how interesting linguistics is. At that point, I knew even I could do better than that, so I became motivated to try to show students

My first teaching job was in Boise, Idaho, a mountainous state in the U.S. Northwest. I taught foreign students from all over the world and got interested in middle eastern dance (belly dance), which I have been doing ever since. I spent two years teaching English as a Fulbright lecturer in Yemen. After returning to Idaho from Yemen, my husband and I decided to come to Japan, which is now our home. I'm glad I have been able to help many students expand their minds and hearts through language learning, and I look forward to acquiring much better Japanese language ability in my retirement years.

社内装丁(1)

本の使い方または『ローマ帝国衰亡史』の事

大井健地(国際学部・芸術学研究科前教授)



E. M. フォースターはこんなふうに記しています。
「シェイクスピアとギボンとジェイン・オースティンが私の好みで書斎にいるときいちばん読みたくなるのはギボンです。ギボンは本好きでしたが、本に支配はされませんでした。本の使い方を知っていたのです」(『フォースター評論集』岩波文庫'96、273頁)。

知的に円熟した読書人は終局的にギボン『ローマ帝国衰亡史』に赴くのだ、とは言えまいか。逆に、一定の年齢に達してギボンに到達する感じの読書生活を送れるようなら、つまり国家や政治というテーマの普遍性を読みこなせるような素養の紳士になりうれば、そのことには満足してよいのではないか。楽しんでこの長尺の文学的史書に沈潜し、味読する時間に恵まれれば、それは人生の幸せなのだ。

英国の核兵器禁止運動のリーダーだった哲学者のラッセル(『芸術としての史書』)、インドの首相ネルー(『父が子に語る世界史』)、アメリカの外交理論家ジョージ・ケナン(『回想録』)、これらの人々はみな、ギボン愛読者なのである。感動の激白的読書感想をそれぞれの著作に記している。精読者、熟読者が思わぬところにいるであろうことは容易に推測できる。ギボンは今も現役で、『衰亡史』は不朽の古典として世界に生きつづける。

日本でも、中野好夫・朱牟田夏雄・中野好之訳で全11巻の筑摩書房版がある。

ギボンは1764年10月15日夕刻、カンピドーリオのユピテル神殿跡のフランシスコ派教会で修道士の讃美歌を耳にする。そのとき衰亡史の構想を得たという(『自伝』)。書きおえたのは1787年6月27日、ところはスイス・ローザンヌ。歴史的記憶のつぼであるローマで書けば史料に溺れて気がおかしくなるはず。ギボンは名門の出ゆえに生活のために働く必要もなく、政界要人のポストからも去り、何より結婚もしておらず(没する時、見守る肉親なくひとり死ぬのだ)、家売ってローザンヌに隠棲し専念できる条件をつくって執筆に集中した。

完成のため「健康と時間とまた根気」の重要さを幾度も自戒している。生没年1737-1794年。享年57歳。死因は陰嚢水腫。異常な小男でキューピッド型の奇妙な肥満体の容姿であること、中野好夫のⅢ巻のあとがきに図版も見える。

ギボンは12年をかけて執筆した。筑摩書房版日本語訳書は18年をかけて完結した。三代目の訳者である中野好之氏が最終巻のあとがきに「生き残った一

人の訳者として」感謝の弁を記すが、なるほど完結まで生きなかった関係者も数多い。発行者(社長、管財人)の名も幾度か変わり発行所の住所も変わった。しかし今は一出版社史に関わるにすぎないそのことにも初版装丁者(告白します、僕です)の思いについても触れない。

書名にあるとおろし、帝国の衰亡の歴史

を扱うのだから紀元前の王制、共和制の時代には触れない。冒頭部、第Ⅰ巻の1～3章はAD96-180年の事績を扱う。五賢帝の時代である。ネルウァ、トラヤヌス、ハドリアヌス、アントニウス・ピウス、そして有名な哲人皇帝マルクス・アウレリウス、この5人の治世。これをパクス・ロマーナ(ローマの平和)といい、ギボンは人類のもっとも幸福だった時代と評する。帝国最大版図はトラヤヌス治世だから以降の領土は小さくなるしかない。1300年かけて東ローマ・ビザンティン帝国の命脈が絶えるまでをギボン一人が叙述する。

加藤周一に「偽善的であることの大切さまたは『ローマ帝国衰亡史』の事」と題された政治省察文がある。そこでは『衰亡史』の引用が上手に活用されている。

資料あさは実は楽しい。本当の本の使い方はリサーチ過程になく、論文執筆過程での集中時にこそ見えてくるのではないかな。

*3月末で本学を退任された大井健地先生のご厚意により、引き続き記事を掲載いたします。既に本学のお仕事からは解放されていらっしゃる先生が無償でご投稿くださり、語学センター一同、心より感謝の意を表したいと思ひます。

引き続き、先生の「詩情のある労働」を通して「良い偶然」をお楽しみください。



筆者蔵の装丁本。ギボン『ローマ帝国衰亡史Ⅰ』中野好夫訳、筑摩書房

ミニコラム 外国語に想う【38】

事務局総務室長
向久保 亨

「英語で広がる新たな世界—地方公務員でも東京・NY勤務—」



片道1時間半もかかる通勤時間を有効に使えないかと、ラジオ英会話講座のカセットテープを聞き始めたのが、27年前の1985年、仕事やストレスで右巻きに絞られた脳が左巻きに解かれるような解放感のとりことなり、今日まで毎日英語に触れることを趣味の一つとしています。1996年にはアメリカに3か月間研修滞在し40余りの役所を訪問、1997年には日本貿易振興会へ1年間出向し日本へ売り込みに来る海外中小企業の仲介など、

2001年からの5年間は、広島平和文化センターで平和市長会議の事務局を担当、日本語を解さないアメリカ人と核廃絶の仕事をし、ムンバイやパリで開かれた平和関連会議やNYで開かれた核拡散防止条約再検討会議へ出席しました。2007年からは2年間、自治体国際化協会NY事務所へ出向し、日本の自治体のアメリカでの活動支援をしながら米国内の20数都市を出張で訪れました。地方公務員という職業でこのような仕事をしようとは、就職時には全く考えられませんでした。英語を趣味にし続けたことで、仕事の世界が広がり、マンハッタンに住み五番街のオフィスへ徒歩で通勤し週末にはセントラルパークでジョギングを楽しむという生活を送ることができました。英語も日々の継続が大切です。

Perseverance is not a long race; it is many short races one after another.

グローバル・ヒバクシャ・プロジェクト 市大生、マーシャル諸島共和国の学生とスカイプで出会い、語り合う

春期休暇中の3月1日に、語学センター408教室において、市大生がマーシャル諸島共和国の学生とスカイプを使って出会い、語り合うというイベントが行われました。これは世界の被爆地の学生達が出会い、つながりを持つ機会を提供することでお互いの経験を分かち合うことを目的として企画されたもので、広島平和研究所のRobert A. Jacobs 准教授がファシリテーターをつとめました。3月1日は、1954年にアメリカ合衆国が南太平洋ビキニ環礁でブラボー実験と呼ばれる核実験を行ない、日本の第五福竜丸が放射性降下物を浴びて被爆した日として知られています。この日、広島市立大学からは7名の学生と国際学部の岩井千秋教授、マーシャル諸島共和国からは南太平洋大学(The University of the South Pacific) マーシャル諸島キャンパスの学生10名と、Tamara Greenstoneさん(Continuing and Community Education Coordinator)が参加しました。



◆平和研究所
Jacobs 准教授

セッションではお互いの自己紹介と日常的な話題の交換の後、被爆がそれぞれの地域にもたらした影響について討論が行われました。マーシャル諸島共和国側の学生は1954年のブラボー実験、広島側の学生は1945年に投下された原爆について説明し、それぞれの地域への影響はいつまでも消えることがないという印象を述べ合いました。

グローバル・ヒバクシャ・プロジェクトでは今後も他のイベントを行う予定で、オーストラリアやアメリカ、カザフスタンと結んで、同様のセッションが予定されています。(**「グローバル・ヒバクシャ・プロジェクト」**の詳細については、平和研究所HPから平和研究所ニューズレター第14巻1号(通巻40号)の記事をご参照ください。)



◆マーシャル諸島共和国の学生と
Skypeで意見交換(408教室)

発行日	2012年5月25日
発行	広島市立大学語学センター 〒731-3194 広島市安佐南区大塚東3-4-1
編集	堀本真由美 伊達美和子(内線:6410)
Phone	(082)830-1509
Fax	(082)830-1794
E-mail	lang@intl.hiroshima-cu.ac.jp
ホームページ	http://call.lang.hiroshima-cu.ac.jp/lang/index.html